文化史学科 2 年　海老塚　紅美　さん

――今回応募しようと思ったきっかけについて教えてください。

2 年次への進級とともに自分が本当に学びたい学問分野を探したいと考えたからです。大学生活の残り 3 年間で何を研究するのか、例えば芸術家の人生、思想や宗教観、教会などの建築物についてなど、興味のある分野は際限なく湧いてきます。いずれも文献中の説明や写真から学んだだけなので、実際の芸術作品や建築物に触れ、現地の図版などを読んで一番心躍るものを探そうと考えました。専攻したい分野として、ヨーロッパ史、キリスト教、ユダヤ教などの方向性は決めていたので、キリスト教の総本山であるバチカン、イタリアへ行こうとしていたところ、この奨学金を友人から教えてもらい、応募に至りました。

――現地での活動はいかがでしたか。

死についてのモティーフを鑑賞することが目的の一つでしたので、主にローマ、バチカン、フィレンツェ、ピサの教会や美術館を巡りました。7 日間の訪問の中で、羽の生えた髑髏や装飾が施された髑髏など、たくさん死のモティーフに接しました。一方、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂だけ死のモティーフが少なく、代わりに、鳩のレリーフがたくさん柱に刻まれていたことが印象的でした。サン・ピエトロ大聖堂の建築年が、他の教会とはやや異なることに関連があるのかもしれないと思いました。

また、思いがけず素晴らしかったのは、ピサのカンポサントと呼ばれる納骨堂です。元々その存在を知らずにツアーで訪れたのですが、納骨堂の名の通り足元にはびっしりと墓標があり、その 4 分の 1 ほどに髑髏が刻まれています。また、フレスコ画には、他の教会ではあまり見かけなかった悪魔の姿がたくさん描かれていました。まさに中世の " 死 " の概念が詰まった建物です。しかし、羽が生えている髑髏は一つも見つからず、カンポサントについての疑問が深まりました。

こうして現地を訪問できたことで、知りたいこと、調査できそうなことが見つかり、今とてもやる気に満ち溢れています。

――今後の学びの目標はできましたか。

今後の学びの目標は、図像学そして天使と悪魔について学び、先の髑髏のモティーフや羽の有無の意味を理解することです。また、死の図像とペストの流行による人口激減は深い関連があると思っていましたが、図像が描かれたのはペスト流行以前であるということがわかったので、何故死の図像が流行ったかについても調査するため、中世ヨーロッパの通史を詳しく学び直し、理解を深めようと考えています。

――発展協力会へのメッセージをお願いします。

この度はご支援いただきありがとうございます。

大変なこともありましたが、それ以上に、とても楽しく、学びたいことを見極めるとともに、足りないものを認識し、文化の違いを体感することができ、素晴らしく充実した 7 日間でした。

この活動を礎とし精進していきたいと思いますので、今後も見守っていただければ幸いです。

ローマの教会で見つけた死のモティーフ「羽のある髑髏」。